

聖教の能詮・所詮に関わる諸問題

——真実に導く方便——

北村文雄

目次

序論

第一章 聖典の解釈における「能詮・所詮」の基礎的理論

第一節 「能詮」と「所詮」の定義とその適用範囲

第二節 「教行信証」における「能詮」と「所詮」

第三節 慈恩の「能詮・所詮」と真俗二諦説

第二章 浄土教聖典の中の「能詮・所詮」に関わる論

第一節 龍樹の中観における「能詮・所詮」の源流

第二節 「往生論註」における能詮と所詮

第三章 親鸞教学における弥陀の真実と方便

第一節 親鸞の真如観

第二節 親鸞教学における真実と方便の構造的関係の考察

第四節 西田哲学における自覚

結論

註&参考文献

序論

親鸞はその撰述の中で、諸経や諸先師の論述に対して誠実で繊細な解釈を施し、そこにこめられた弥陀法の真実を求めていった。そ

して、真実が人間の思惟の及ばぬ所にあり、畢竟する所は言説も不可能であるという境地に至った。また經典や師釈を拝受するとき、自力・驕慢の心を伴いがちな「読」「学」よりも「聞」「信」を重要視し、能詮に囚われず、その奥に秘められた本意(所詮)をたずねゆく態度を常に堅持していた。

今日、宗祖の教えを仰ぐ私たちとつても、聖教の能詮(言語表現)は、その所詮である弥陀真実の法を明かす上で重要なものと考えられるが、この能詮と所詮の間には様々な問題や障害が介在していて、理解不足や誤った理解、曖昧な理解、偏った理解等の生ずるものになっているように思われる。このような經典における能詮と所詮とに関わる諸問題を究明して他力真実への道を切り開く一助としたい。

第一章 聖典の解釈における「能詮・所詮」の基礎的理論

第一節 「能詮」と「所詮」の定義とその適用範囲

一、言語学者ソシュールが提起している「能記」(シニフィアン)と「所記」(シニフィエ)を挙げて「能詮」「所詮」との近似性について考察し、その適用範囲が、「語句」「文」「文の集合」にわたっていることを示す。

二、『大漢和辞典』(諸橋轍次)、『角川新字源』(小川環樹 他)、『仏教語大辞典』(中村 元著)の三辞典から「能詮」「所詮」につい

てまとめ、それが広く一般に言語表現において用いられていることを明らかにする。

第二節 『教行信証』における「能詮」と「所詮」

一、『教行信証』の構造的な捉え方として、「教」を「能詮」として「行・信・証・真仏土」を「所詮」としている。しかし視点を変えて見れば、「教」も単なる能詮ではなく、「教」そのものの所詮があるはずである。

二、総序の中の文例により、各文節における主部・述部の能詮・所詮の関係、比喩的表現の能詮・所詮の関係、修飾語・被修飾語の能詮・所詮の関係を考察する。

三、教巻の文章表現から、「真実の教」と『大無量寿経』、「如来の本願」と「経の宗旨」、「仏の名号」と「経の体」等の間における詮の能所関係を考察し、能詮の有限性と所詮の無限性を考察する。

第三節 慈恩の「能詮・所詮」と真俗二諦説

一、慈恩は、経体を文と義の二体とし、名・文・句等を能詮と言ひ、文の義を所詮とした。

二、慈恩は、真俗二諦に各々四重の諦を設けて真と俗との関係構造を明らかにしている。

第二章 浄土教聖典の中の「能詮・所詮」に関する論

第一節 龍樹の中観における「能詮・所詮」の源流

一、能詮・所詮は言説があつて初めて成立するものであり、その源

聖教の能詮・所詮に関わる諸問題

流は龍樹の中観思想に見出すことができる。龍樹が『中論』において説く、縁起・空性・仮の在り方を考察する。

二、龍樹は『中観』『観四諦品』の中で一切諸法の空性について、世俗諦・第一義諦の二諦を以て説いている。第一義諦は、本来言説できないが、仏は言説を以て衆生を第一義諦に導くと言う。

第二節 『往生論註』における能詮と所詮

一、『論註』と『浄土論』と無量寿経（浄土三部経）の関係を詮の能所で考察する。

『浄土論』の構成から見ても、偈頌と長行、『論註』の巻上と巻下における詮の能所を考察する。

二、偈頌の各句の偈文と五念各門との間における広・略、詮の能所について考察する。

『論註』…帰納的…広から略へ（広…能詮、略…所詮）『論』…演繹的…略から広へ（略…能詮、広…所詮）

三、『世尊我一心帰命尽十方無碍光如来』（礼拝門・讃嘆門）の意味の切れ目と句の切れ目の違いを見る。

四、『観察門』で説かれる安樂の莊嚴は作願の目的内容であるから「作願門」の所詮となる。

五、「回向門」は「作願門」と呼応して改めて作願を強調して「作願門」及び『論』全体の所詮となっている。

六、八番問答における逆誘摂取の問題とその所詮を探る

七、曇鸞の二種法身説における法性法身と方便法身の「不二不異」、

「広略相入」について考察し、「実相身」の所詮が「自利成就」の法性法身、「為物身」の所詮が「利他成就」の方便法身であることを明かす。

第三章 親鸞教学における弥陀の真実と方便

親鸞教学の中核にある「真実」は、龍樹の空思想に基づく二諦説及び他力易行説と天親の『往生論』とを承けた曇鸞の「二種法身説」が基盤となっている。「真実と方便」、「真と仮・偽」、「隠と顕」、「弥陀と衆生」等、あらゆる面において適用し、畢竟じてただ一つの真実、弥陀の本願真実に帰すべきことを説いている。

第一節 親鸞の真如観

一、『唯信鈔文意』において親鸞が究極の果てに得た所詮は、龍樹の「第一義諦」であり、天親、曇鸞の「一法句」であり、いずれも究極の所詮は一如に帰する。真如として、涅槃、滅度、無為等の十二異名を挙げている。

二、『唯信鈔文意』において親鸞は、曇鸞の「二種法身説」を承けて、真如（一如）を法性法身とし、衆生を済度するため、形をあらわした姿を方便法身としている。

三、『自然法爾章』における「自然」と「無上仏」には弥陀真実の究極の所詮があるように思われる。「自然」の定義として「自」は「おのづから」といい、「然」は「しからしむ」、いずれも人間のはからいが加わっていないこと、「法爾」も「本来あるがまま」

という意味である。

四、親鸞の言う真実は第一義諦、法性法身であり、方便、仮は世俗諦、方便法身である。また阿弥陀仏は真実そのものと考えていた。法・報・応の三種身は真実から出現したもので、不二不異であると言う。

第二節 親鸞教学における真実と方便の構造的関係の考察

一、親鸞は「真と仮（化）」、「隠と顕」等について二諦説を基盤として考え、それらの関係においても仮設された能詮・所詮に執着することなく、柔軟自在に頭を切り換えて真の所詮を求めていったにちがいない。

二、親鸞は、無量寿経にも、仮（化）の要素が少なからず含まれていることを厳しく見つけたにちがいない。そしてその解釈については自分の偽らざる心との一致点を見出すために辛労もあつたのではないかと推測される。二諦説に支えられた仮（化）の存在価値とその限界を見つめ、人間の思惟範囲内のものをすべて仮とした。

三、『化身土巻』における「三経隠顕」の問題を考察し、第十九願と『観経』、第二十願と『阿弥陀経』は顕の面では仮であるが、文義の奥（隠）には弘願門に導くための「要門」、「真門」とした親鸞の意図を、能詮、所詮の面から探る。

第四節 西田哲学における自覚

一、自覚とは自己限定であり、自己が自己において自己を見ること、

自己が自己を知ることである。この「自己が」の面がノエシス面で「自己を」の面がノエマ面と呼ばれている。ここに能詮する自己と所詮の自己が見られる。ノエシス面はノエマ面に対して絶対無でなければならないと言う。

二、西田は、「存在の場」としてプラトンの「ティマイオス」から「場所」と名づけるものを想定した。それはフッサールの「意識の野」であり、自己を空しくすることによってありのままに映すことができる考えた。

結 論

親鸞教学は、数多くの経・論・釈の中から浄土教の所詮とする弥陀真実の法に私たちを導く指標である。私たちは親鸞の撰述を通して数々の聖教に触れることができるが、それらの能詮は必ずしも真実への安易な一本道ではない。親鸞は空思想と二諦説を基盤として真実を求める中で、聖教の能詮における「仮」の存在を真実に導く方便としてその価値を認めながらも、仮の所詮に甘んじることを厳しく戒めた。その意は「化身土巻」の中に強く表明されている。自力の無功性を自覚し、仮を離れることが「他力への回心」であり、真実の所詮であり、親鸞にとつての「信の一念・行の一念」であった。聖教の能詮は私たち衆生をして真実に至らしめる仏の方便であるが、それを正受しない限りは所詮の真実信心は得られない。したがって、この角度からの研究も重視されねばならない。この意味で、